

3 土 器——旧平城京城における平安時代の土器とその変容——

平城宮・京から出土した平安時代の土器のうち、平城上皇期の遺構にともなう土器群 (SE 311 B・SK238¹⁾等) およびそれに続く東三坊大路東側溝上下両層の土器群 (SD650 A・B) については既に報告を行ない、また9世紀から10世紀初頭頃までの土器の変容についても考察している²⁾。

- * また、1974年には薬師寺西僧房の発掘調査で天禄4(973)年の火災で焼失した僧房跡を確認し、その床面や焼土層から大量の土器群 (以下、西僧房床面土器) を検出した。これについても一部既に報告し、10世紀後葉の基準資料として周知されているところである³⁾。

今回報告した馬寮地域や平城京城の調査によってSD650 Bの土器群に続く土器群や西僧房床面土器に続く土器群の出土例が増え、10世紀から11世紀初頭にかけての時期の土器の様相が

- * 次第に明らかになってきた。ところで、11世紀前半から中頃にかけて、窯業史において中世的表象と捉えられる瓦器が出現することはほぼ確実であり、ここでは、その前史とも言うべき10世紀から11世紀の土器、特に在地で生産され普遍的な存在である土師器・黒色土器の食器を中心にその変容過程を整理してみたい (別表4・5・6参照)。

A SD650 B の土器

- * SD 650 Bの土器群は伴出した銭貨から9世紀後半から10世紀初頭頃に位置付けられ、木簡や墨書土器等の内容から何らかの官署もしくは寺院に関連するものと考えられている。SD650 Bの土器群は出土遺構が溝であるという制約があるため、必ずしも純粋な型式ではなく、前後の時期のものを含んでいる。今回、SD 650 Bのものより純粋な土器群として玉手門付近の大土壙SK1623の土器について報告した。SK1623の土器には、大量の土師器の他に施釉陶器 (灰釉・緑釉・青磁・白磁等) の高級品も含まれ、平安京の事例と比較しても遜色なく、当時の大和の貴族層が使用したのと考えられよう。ここでは、SK1623とその前段階に位置づけられるSD650 Aとの比較を中心に、この土器群の特徴を明らかにしたい。

土師器の器種には、杯A・杯B・同蓋・皿A・皿B (磁皿)・皿C・高杯・甕・罍釜・竈など 土 師 器

- * みられない。

杯Aには、口径15.5~17.5cm、器高2.5~3.5cmの杯AI、口径14.0~15.5cm、器高2.5~3.5cmの杯AII、口径14cm未満、器高2.5~3.0cmの杯AIII (もしくは碗) に分化している。杯AI~IIIの調整法にはc・eの両手法があり、その比は66:34でc手法が多い。SD650Aの杯AIにはe手法はまったくなかったが、この段階で、杯AIにはじめてe手法が登場するのである。

- * しかし杯AIに限れば、c手法とe手法の割合は72:28でc手法が依然として多数を占める。一方、杯AII・AIIIでは、両者の比は55:45でe手法の増加が極立っている。e手法の増加にともない、AII・AIIIでは器高が前代に較べ低下する傾向にある。

1) 『平城宮報告IV』p.24~30。

2) 『平城宮報告VI』p.145~150。

3) 『昭和49年度平城宮概報』p.42~43、『年報1975』p.31。

杯Bには、口径20cm以上のものと口径17cm前後のものがあり、前代とほぼ相似た法量分布を示すが、杯Aと同じく器高が低下する傾向を示している。杯Bにはe手法によるものではなく、すべてc手法であるが、ヘラミガキの技法はすでに消失している。

皿Aは、口径17cm以上、器高2.5cm以下の皿AⅠと、口径15cm前後で器高2.5cm以下の皿AⅡの2種があるが、AⅠの量は少なくなり、AⅡが増加する。皿Aの調整にはcとeの両手法があるが、AⅠでは、c:eは71:29でe手法は少ない。AⅡではc:eは60:40で、前代に較べるとeの割合が増している。皿Aについてもe手法の増加に対応して、器高が低くなる傾向が見られる。

皿Bは、量的に少ないが、皿Aに高台を付す形態ではなく、磁器系の皿を模した器形である。すべてc手法で調整する。

黒色土器 黒色土器の器種には、杯A・杯B・皿A・皿B・椀・鉢A・鉢C・小壺・甕・硯等がある。組成の上では前代と大差ないが、杯Aが著しく減少し、杯Bが相対的に増加している。杯Bの法量分布を見ると、前代の杯Aの法量分布とほぼ一致し、杯Aの欠を補填している状況が知られるが、それに依じて器高が低下している。

次に杯A・杯Bの調整をみると、外面をヘラケズリするものが少なくなり、同時にヘラミガキを施す例も少なくなっている。内面に施す暗紋は、底部においては減少し、口縁部の暗紋も単純な螺旋紋に変化している。従前の報告で杯Bと一括したものの中には¹⁾、灰釉・緑釉器形をうつした椀が含まれ、これらの出現もこの時期における黒色土器の特色の一つである。

B SD650B に続く土器群

SD650B に後続する土器群としては、馬寮地域の土壙SK7094、平城京左京六条三坊十三坪の土壙SK21²⁾・同十五坪の井戸SE01³⁾等から出土したものがある。この他、飛鳥地方では坂田寺の井戸SE110B上層出土の一括、平吉遺跡の木棺墓SX16の蓋上に副葬された一括遺物等がある⁴⁾。上記の土器群は、在地の一般民衆あるいは土豪達の使用したものとみなされ、一括性については問題がないが、いずれも量的に少なく、また組成的にみても全器種を網羅しているわけではない。したがって、前述のSK1623や後述する西僧房床面土器との対比は、必ずしも十分⁵⁾に行なえないきらいがあるが、この欠を補うものとして平安京の事例を採用することにしたい。

平安京における10世紀中頃の土器群としては、左兵衛府の溝SD01⁵⁾、右京二条二坊SX01⁶⁾、上京区烏丸通出水下楼鶴円町で検出された井戸(以下、立会17-井戸1と略記する)⁷⁾等の土器群が知られている。

1) 『平城宮発掘報告VI』PL76, 689など。

2) 奈良市教育委員会『昭和58年度 奈良市埋蔵文化財調査報告書』1984, p.63~65。

3) 同上 p.68~69。

4) 奈文研『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』1978, p.42

5) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』(京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-11) 1978, p.82~85, 図版35・82・83。

6) 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度 平安京発掘調査概報』1983 p.39~42, 44, 図版38。SX01からは天曆7(953)年の紀年銘をもつ墨書土器(緑釉陶器)が出土しており、平安京の中でも10世紀中頃を代表する資料となっている。

7) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『1978年度京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報II』1981, p.167~170, 表36, 図版43・106~107。

また前掲の大和の土器群についても、それぞれに前後関係が認められるが、資料数が少ないため、その点は今後の課題として保留し、SD650Bと西僧房床面土器との間におさまる土器群として一括し、この時期の特徴を捉えるにとどめたい。

土師器の器種には、杯A・皿A・甕・鍔釜等がある。この他、平安京においては、杯B・皿土師器

* B等も知られているが、高杯はすでにその組成から消失している。

杯・皿ともすべてe手法による調整でc手法によるものはない。また、杯・皿とも器壁が薄くつくられ、ひずみをもつものが多いのもこの時期の一つの特徴である。杯Aには、口径17cmを超える杯AIも平安京では知られているが、多くは口径14~15cm、器高3cm前後の杯AIIである。皿類における最大の変化は、奈良時代の伝統を引く広く平坦な底部と外傾する短い口縁部からなる皿Aが姿を消すことであり、それに替って杯Aの器高を低くした形態の皿が登場する。e手法で調整するため、屈曲する口縁部で丸底に近い形態に変っている。したがって、杯・皿の区別は極めて困難であるが、法量的なまとまりをみると器高2.5cmを基準にそれ以上のものを杯、以下のものを皿として区別可能である。皿Aでは、口径17cmを超える皿AIが姿を消すとともに、皿AIIは法量が小さくなる傾向を示す。

* 杯Bは、口径15cm前後の例と20cmを超える例が知られているが、e手法で調整するため器高が著しく低下している。

食器類には、この他、口径10~12cm、器高2cm未満の小皿が新しく登場する。大和ではこの種の小皿に該当するものはないが、10世紀中頃でもやや新しい時期とされる平安京立会17一井戸1において出現している。

* 黒色土器の器種には、杯B・椀・甕などがあり、杯A・皿A等がみられない。杯Bは前代に較べ量的に少なくなり、口径16cm、器高4cm前後の法量になる。調整法については前代と大差ない。杯Bは、この時期でも比較的古い段階、例えば平安京左兵衛府SD01・平城京左京六条三坊十五坪のSE01・飛鳥坂田寺SE110B等に認められるが、全体的にみれば、杯Bが消失してゆく傾向がこの時期の特徴となっている。

* 杯Bに替って登場するのが、前代にその先駆けがあった灰釉・緑釉を模した椀類である。椀には、口径16cm前後のもの13cm程のものがあり、すべてA類に限られている。

C 薬師寺西僧房床面土器

土師器の器種には、杯A・杯B・皿A・鉢・甕・鍔釜の他に前代までは極めて少なかった瓷土師器

器系器形を模した椀・皿類が多数あり、この時期を特徴づける遺物となっている。杯A・杯B・皿Aは、胎土組成ならびに器形から複数の産地からもたらされたことが知られ、極めてバラエティに富んでいる。それらは器高の高い杯と器高の低い2~3種の皿からなるが、産地の差を超えて比較的まとまりのある法量分布を示す。e群を除き、杯と皿の関係は前代と同様器高の差で区別される。杯Aには、口径17~19.5cm、器高3~4.3cmの杯AIと、口径13~15cm、器高2.8cm以上の杯AIIがある。皿には、口径13~15cm、器高2.5cm未満の皿AIIの他、口径

* 10~12cm、器高2.5cm未満の小皿の2種がある。杯A・皿Aの法量の分布は前代と同様なあり方を示す。杯Bは、量的に少ないが、前代同様器高の低い形態である。

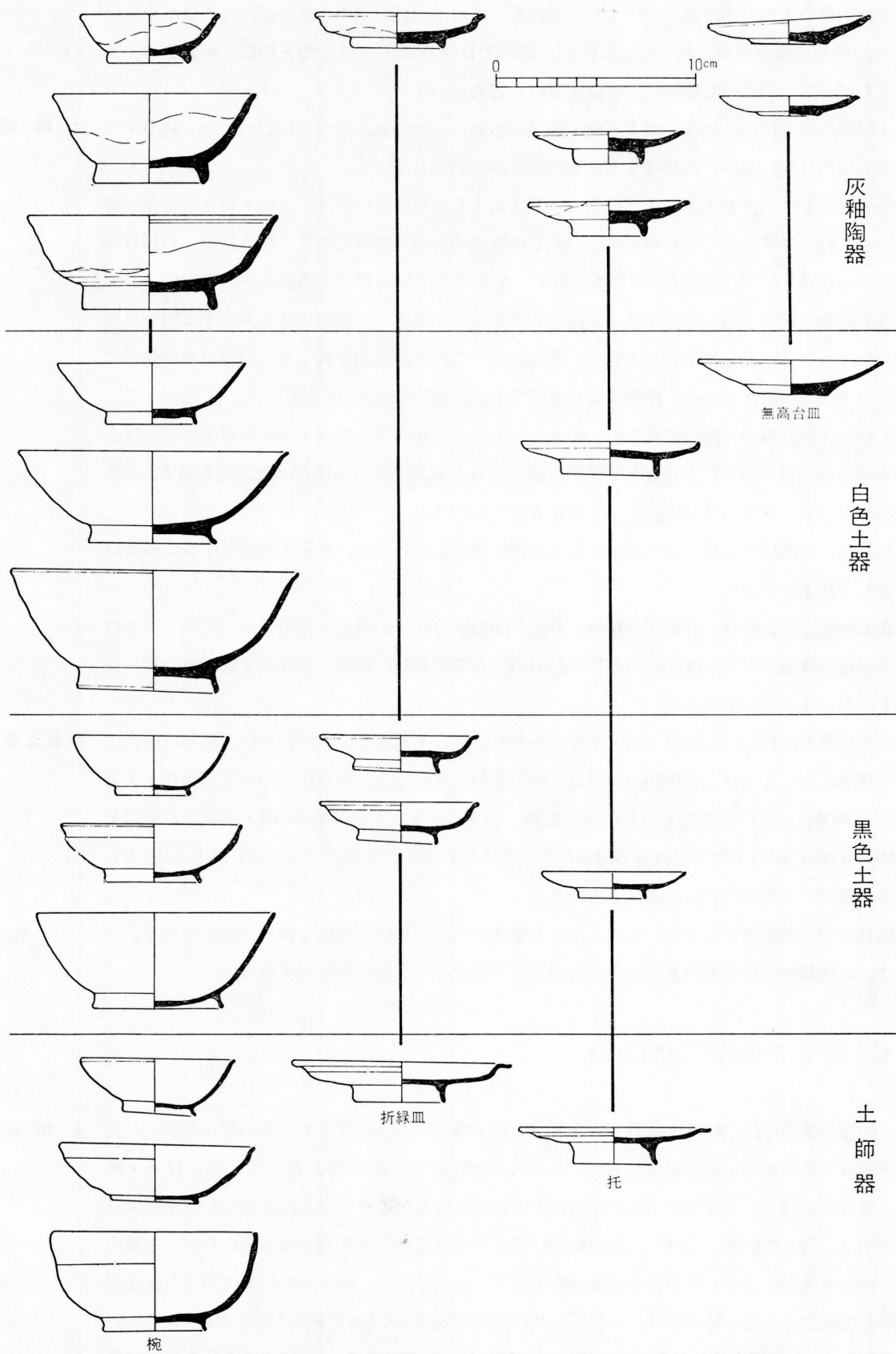


Fig.58 薬師寺西僧房床面土器と灰釉陶器との対応関係
 (灰釉陶器は恵那市正家1号窯出土品 同報告書掲載図面を原図とした)

黒色土器の食器においては、杯Bが完全に消失し、瓷器系形態の碗・皿類のみになる。この他、鉢A・鉢C・火舎・把手付甕・甕Aなどがある。また、前代では黒色土器B類は皿B等に若干見られたが、この時期から碗にもB類が登場し、B類の増加もこの時期の一つの特色となっている。碗には、口径15~16cm、器高5~7cmの碗Iと、口径13~14cm、器高4cm前後の碗

* II、口径10~11cm、器高3.5~4.0cmの碗III（小碗）の3種に分化している。碗Iは、径高指数40程度で口径に較べ器高が高く、外傾度も低く、内彎する口縁部からなる深碗であり、従前の瓷器系器種にはなかったものであり、近江系緑釉や灰釉末期にみられる深碗を写したものである¹⁾。また皿Bにも口縁部が立ち上り、端部近くで外反する折縁皿があり、これについても灰釉陶器の写しであることは言うまでもない²⁾。

黒色土器

* 土師器・黒色土器の他に、砂をほとんど含まない白色の胎土を用いロクロで成形した土器があり、他と区別する意味で仮に「白色土器」と呼ぶ。軟陶緑釉の生地に通じ、おそらく窯で還元炎焼成されたものである。その器種は、瓷器系の碗と皿のみである。皿には、瓷器系の皿類と共通する高台付皿と、高台をつけず糸で切りはなしたままのものや、皿部が極端に浅い托とされている器形がある。

白色土器
(仮称)

* D 西僧房以降の土器群

西僧房床面土器に後続するものとしては、薬師寺金堂付近の井戸 SE48や馬寮 SB7026掘形出土のものがある。

土師器の器種からは、杯Bや瓷器系の碗・皿・甕等が消失し、杯A・皿A・羽釜のみの組成となるようである。

土師器

* 杯Aは口径15cm前後・器高2.5~3.5cmの杯AIのみとなる。

皿Aは口径12~14cm、器高2.5cm未満の皿AIIと、口径10~12cm、器高2.5cm未満の小皿の2種になる。

黒色土器の器種も、碗・皿のみの組成になる。ともにA・B両類がある。碗は前代同様、碗I~IVに分化しているが、II・IIIは量的に少なく、良好な資料はない。碗Iは前代同様、深碗形態で、口径15~16cm、器高5~6cmである。A・B両類ともに前代に較べ器壁が厚くなる。A類の碗については、口縁部外面に粗いヘラケズリやヘラミガキを施す例もあるが、総じて調整を加えないものが多い。口縁部の内面のミガキは、従来の手法と異なり、瓦器碗に一般に見られる連続回転ミガキに変わる。先が丸味をもつミガキ原体を使用するため、ミガキの幅は広い。この連続回転ミガキも雑で、ミガキ残しの部分が多く、ハケ目調整痕が残るばあいが多い。

* 底部内面のミガキも雑でジグザグ暗紋風になる。

黒色土器

一方、B類の碗は、外面のミガキが丁寧で、3回程度に分けて横方向にみがく。高台内外面、底部外面までミガキを施す。口縁部内面のミガキは、A類と同様に連続回転ミガキに変わる

1) 緑釉・灰釉にみられる深碗も、本来、森田勉の分類による青磁碗II類を写したものである。

2) 多治見市教育委員会『平尾遺跡・虎溪山遺跡』1950、恵那市教育委員会『正家1号窯発掘調査報告書』1983、等の報告を参照された

い。深碗・折縁皿については、猿投窯でも生産されているが、床面土器の灰釉陶器のそれはいずれも東濃系諸窯である。名古屋大学文学部助手 斎藤孝正氏の教示による。

が、先の尖った細い原体で丁寧にみがく。底部内面は、一方向のミガキで密に施し、A類に比べ調整は極めて丁寧である。

平城京左京六条三坊十三坪井戸 SE14・15の一括品は、SE48に続く一群で瓦器出現直前にあたる時期に比定できる¹⁾。

土師器 土師器は前代に比べ器壁が厚くなる。口径17cm前後、器高4cm前後の大皿と、口径15cm前後、器高2cm程の中皿、口径10~11cm、器高1.6cm前後の小皿がある。大皿・中皿は、平底と内彎する口縁部からなる形態に変わり、前代同様e手法で調整するが器壁が厚いためほとんど屈曲しない。小皿についても扁平で口縁部がくの字形に屈曲し、端部が内側に丸く肥厚する新しい形態となる。これらの大・中・小の皿は古手の瓦器とセット関係をなす土師器皿と共通する器形であることは言うまでもない。*

黒色土器 黒色土器にはA・B両類あるがA類については良好な資料はない。量的に見ればB類が増加するのがこの時期の特徴である。器種は椀だけで、皿はすでに消失しているようである。椀には大椀・小椀の2種があるが、内外面のミガキは雑になり、高台部・底部外面にはミガキを施さなくなる。底部内面のミガキも同様粗くなり、ジグザグ暗紋風に変る。

E 小 結

 *

以上、10世紀から11世紀にいたる時代の土師器・黒色土器の食器類の変容について概観した。最後に、今問題にしたこの時期の土師器・黒色土器の両部門における生産動向とそれを導き出した社会経済的な要因について考察してみたい。

10世紀中頃(統SD650B)を境にして、それまで成立していた器種構成は次第に崩壊していく。その一方では、土師器・黒色土器の両部門とも量産化をめざし、調整手法の簡略化と器形の規格化が一層進行し、前者は杯・皿・煮沸具を、後者は瓷器系器形の椀・皿を専門的に生産するようになる。*

そもそも、瓷器系の器種である椀・皿は、中国陶磁器(青磁・白磁)の影響下に成立したものである。これらは、平安時代の初め律令国家体制を担う支配者層の食膳に供されるべく生産されたものである。平安前期の土器類の生産状況を見ると、土師器・黒色土器の部門では、若干瓷器系器形も生産しているが、基本的には奈良時代の系譜を引く器形を生産している。また須恵器も同様に奈良時代の系譜を引く器形を生産しているが、食器類の生産は減少している。それに対し緑釉・灰釉の部門では、もっぱら瓷器系器種を生産している。すなわち平安前期においては、瓷器系器種は緑釉・灰釉陶器として生産供給するのが原則であったとみなされよう。では、平安時代中期と言われるこの時期ではどうであったろうか。ここでは、旧京にとりのこされたとは言え、依然として古代権力の一端を担っていた薬師寺の僧侶達の食器を例にとり、その実体をみることにしよう。*

天禄4(973)年に焼失した西僧房床面出土土器の食器をみると瓷器は極めて少なく、土師器・黒色土器が圧倒的に多くを占めている。そして、土師器・黒色土器・白色土器の瓷器系器種(椀・皿)が相当量存在する点に注意したい。これら瓷器の写しの存在は瓷器類の供給が十分に*

1) 奈良市教育委員会『昭和58年度 奈良市埋蔵文化財調査報告書』1984, p. 62~65。

行なわれなくなった状況を反映したものである。前述したように、土師器・黒色土器が写した
瓷器は、近江系緑釉（深碗）や東濃の虎渓山窯式の灰釉陶器であり、両者とも瓷器生産の末期
的段階に位置付けられている。こうしてみると土師器・黒色土器の工人が在地で瓷器系器形を
生産するようになった事実は、結局の所、前代に成立していた瓷器生産体制の崩壊と表裏一体
* の関係にあると言えよう。

このような瓷器系器形の在地生産供給化は、土師器と黒色土器との間での淘汰を経たのち、
黒色土器＝碗、土師器＝皿という器形別分業生産に移行し、器形の規格化と量産化を計り、や
がて在地向けの供給をめざす生産を志向していく。こうした帰結点が、瓦器の出現と言えよう。

4 馬寮地域出土の柱根の年輪年代学による研究

* 1959年にはじまった発掘調査によって、平城宮跡からすでに500本以上の掘立柱建物の柱根
が出土している。これらの柱根のほとんどすべては、8世紀～9世紀初頭の間で使用されたこ
とが確実なものであり年輪年代学の研究に適した資料と考えられる。また柱根の主要樹種はヒ
ノキとコウヤマキであるが、これらは樹種の面からみても年輪年代学の研究に適することが判
明している¹⁾。したがって、平城宮跡出土の柱根は年輪年代学の研究を進めるにあたって貴重な
* 資料になるものと思われる。現在、これらの柱根を用いて、ヒノキ材で725年分、コウヤマキ
材で668年分の標準（平均）年輪曲線を作成済みである。この標準年輪曲線はまだ実年代と対応
していないが、おおむね紀元後1世紀から8世紀にわたるものと推定される。この2樹種の標
準年輪曲線に基づき、馬寮地域から出土した柱根のうち遺存状況の良い12本を選び、年輪年
代学の方法によって年代測定を試みた。

* A. 試料と方法

馬寮地域から出土した柱根88本の樹種は、ヒノキ47本、コウヤマキ35本、ツガ2本、不明4
本であり、ヒノキの占める割合がやや高い。これらのうち、4つの遺構から各々3本ずつ、合
計12本を選んで試料とした。ヒノキ材6本、コウヤマキ材6本である。ヒノキ材はSB5955・
6425（遺構時期区分第Ⅱ期）から、コウヤマキ材はSA5950（第Ⅲ期）・SB3960（第Ⅳ期）のもので
* ある。これらはいずれも心持材であり、横断面はほぼ円形ないし多角形状に加工されている。
試料の調整と年輪幅の測定 12本の柱根を下端から30～50cmの部位で切断し、木口面を電気
ベルトサンダー等で研磨した。研磨面に2～4方向の測線を設定し、年輪幅を測定した。測定
には年輪読取器（アメリカ・ヘルソン社製、双眼実体顕微鏡付、0.01mmまで読取り可能）を用い、各測
線について外縁部の年輪から始めて中心に至る方向で行なった。測定した年輪データをパーソ
* ナルコンピューターに入力し、各測線の測定結果を同一年ごとに合計、平均値をその年の年輪
幅とした。偽年輪については、生物用顕微鏡を用いて晩材類似の組織か否かを区別することに
より判定した。

1) 『年報1984』p.50～51。光谷拓実「日本における年輪年代学」（名古屋営林局『みどり』312号1984）
p.28～37。